



神谷学市長 からの メッセージ

今年の初夏、父が91歳にて永眠いたしました。近年は入所施設でお世話になっており、残念ながらコロナ禍で看取りができなかったのですが、穏やかな臨終だったとお聞きし安心しました。

家族の死去は25年ほど前の祖母が最後で、以来家族を見送ったことはなく、ましてや私自身が喪主を務めることは初めてなので、正直不安と戸惑いがありました。コロナ感染の再増加、また公務ご多用な方々にご迷惑かけないようにと配慮し、近い身内のみで葬送することとしました。

そうした判断の後、父の亡骸^{なきがら}周辺には静かな時間が流れ、家族や親族が入れ替わり父とゆっくり対面する場が確保されました。おかげで、私達は日常生活のリズムを保ちながら、心の整理をすることができました。

父の亡骸が家に安置されたその日、隣家に暮らす娘と4歳と2歳の孫がやってきました。私は幼子に「人の死」というものを説明する言葉を見出せず、彼らがどんな行動をするのかと見守っていると、その空間に入った途端、

お見送り

上の孫は静かに父の顔に見入り無言、下の孫も娘のそばで終始無言。ともに人の死というものを確かめて、自分なりの理解に努めているように見えました。

私が幼い頃、近所の人が逝去されると、祖母達の通夜のお参りによくついて行きました。その際、ご遺体の前で親族から故人を偲ぶ思ひ出話を聞かされ、理解できないながらも、人の生死について教わり考えさせられた記憶があります。

それだけに核家族化が進んだ現代、しかもコロナ禍、子ども達のみならず私達も身近な方の逝去に直面する機会が減少し、死をリアルにとらえられなくなっているのではないかと案じてきました。

死と向き合うのは重苦しいことであり、忌み嫌われがちなことですが、人ひとりの命の重さに思いを馳せ^は、運命的に直面した死の意味を咀嚼^{そしゃく}し消化してゆくことが、人としての成長やその後の確かな歩みにつながるような気がします。故人と遺族それぞれにとって、葬送の意味はそこにあるのではないかと感じました。



篠目リサイクルステーション開業

図▶清掃事業所(☎(76)3053)

10月31日(月)に新しい資源回収拠点「篠目リサイクルステーション」がオープンします。

- 利用時間 夏季(4月～9月)⇒午前10時～午後6時
冬季(10月～3月)⇒午前10時～午後5時
※年末年始・臨時休業日を除く。
- 場所 篠目町本郷7-1
- 回収品目 新聞紙・折込チラシ、雑誌、雑がみ、乾電池、ボタン電池、蛍光管、古着・タオル・毛布、ペットボトル、牛乳パック、ダンボール、プラスチック製容器包装、15cm以下の小型電子機器
※プラスチック製容器包装を持ち込む場合は、市指定の黄色いごみ袋に入れてください。
※事業系古紙の持込みはできません。

